

R. I. District 2610. ROTARY CLUB OF UOZU

## 魚津ロータリークラブ会報誌

2013-2014年度 RI会長 ロン D. パートン

2013-2014年度 魚津RC会長 若井 貞克



第2886回 例会報告

2013年9月6日



- ・点鐘・握手
- ・君が代斉唱
- ・ロータリーソング  
「奉仕の理想」
- ・四つのテスト唱和

卓話、全内容を掲載するため挨拶文等を省略し写真だけの紹介とさせていただきます。

### ゲスト並びにビジターの紹介

魚津工業高等学校

教 頭 櫻野克也 様  
2 年 生 杉田拓帆 君  
2 年 生 北山剛士 君



米山奨学生 セツ キセイ 様



**誕生日祝**

9月4日 中尾夫人 (58歳)



9月24日 平崎さん (72歳)



**開会挨拶**

若井会長

**幹事報告**

愛宕幹事

★9月例会案内

9月13日 夜間例会「旬の会」

(いけがみ) 点鐘：18:30

会費 会員 3,000円

ご夫人 2,000円

バス：18:00 ホテルサンルート魚津裏 18:30 電鉄魚津

9月20日 魚津西RCとの合同夜間例会・・・(グランミラージュ)

9月27日 企業訪問・・・・・・・・・・・・・・・・(広浜建材(株))

点鐘：12:30

★9月SAA補助・・・・・・・・広浜さん、大村さん



佐渡さん復帰挨拶

6月10日に産休に入って、6月22日に生まれました。予定日より2週間早く生まれたので大丈夫かなと思っていましたが3500の大きい子が生まれました。

女の子で名前は「侑生奈(ユイナ)」です。

産休明けで、何かやらかすかもしれません。が今後ともよろしくお願ひします。

## 出席報告 三島出席委員長

★本日の出席者 33名  
欠席者 7名  
出席率 82.5%  
メイクアップ済 中島さん

★第2884回のメイクアップ  
中田さん  
★第2880回の修正出席率  
72.5% → 75.0%

## ニコボックスの報告 なし

## 委員会報告 ★中川広報委員 「ロータリーの友」の紹介

## 本日の卓話

### 「第36回インターアクト年次大会について」

魚津工業高校生徒会の杉田拓帆、北山剛士さん



国際ロータリー第2610地区第36回インターアクト年次大会は先日8月24日に砺波市文化会館で行われました。スポンサークラブは砺波ロータリークラブ様。ホスト校は富山県立砺波工業高等学校でした。私たちは魚津工業高校の生徒会としてそれに参加しました。参加されたロータリークラブは、高岡西、南砺、七

尾、などの計10組43名の皆様です。

続いて、参加されたインターアクトクラブは、こちらの各学校のクラブ員94名 顧問15名、計109名の皆さまです。

始めに開会式が行われ、歓迎の言葉として、ホスト校である砺波工業高等学校インターアクトクラブ会長の<sup>ありのはじめ</sup>有野元さんが、感謝とともに「同じような活動でもやり方が異なる活動等、お互いの活動を共有することで今後の活動の可能性が広がれば幸い」と述べられました。

続いて、砺波工業高等学校校長の寺島吉弘様<sup>てらしまよしひろ</sup>から歓迎の言葉をいただき、インターアクトの目標の意義と仲間と共に高め合い、理解し合うことの必要性を述べられました。

次に砺波市長の夏野修様<sup>なつのおさむ</sup>からは、第36回インターアクト年次大会が、富山県・石川県から多数の方々をお迎えして『チューリップと散居の里』<sup>さんきよ</sup> 砺波市において盛大に開催されることにお祝いと感謝を述べられました。

次に国際ロータリー第2610地区 小松ロータリークラブ、ガバナーの湯浅外志男様<sup>ゆあさとしお</sup>は、インターアクトは奉仕と国際貢献<sup>こうけん</sup>、世界的友好精神の中に、活動する機会を青年に与えるために結成されたこと。あわせて地域社会の奉仕活動も行うインターアクトクラブにとって、世のために生きることを考えている崇高な教育の場でもあることを述べられました。

次に国際ロータリー第2610地区魚津ロータリークラブ インターアクト委員長の野澤良成様<sup>のざわよしなり</sup>はお話の中で「インターアクターは勉学共に様々なボランティア活動に参加する事で、社会に出ても通用する人格形成が出来ている事を確信致しております」と述べられました。

最後に、砺波ロータリークラブ会長の渡辺俊行様<sup>わたなべとしゆき</sup>が、「本日は多くのインターアクトの仲間とふれあい語り合える最高の場だと思っています。奉仕の輪・友情の輪を広めインターアクトの目標に対する理解を深めていただければ幸いです。」と歓迎の言葉を述べられました。

インターアクトクラブガバナー表彰では10名の生徒が、国際ロータリー第2610地区ガバナー、湯浅



外志<sup>としお</sup>様より表彰を受けました。ガバナー<sup>ひょうしやう</sup>表彰は昨年度インターアクトクラブの活動において積極的に参加した生徒に対して表彰されるものです。本校からは、米丘輝、前生徒会長が<sup>ひょうしやう</sup>表彰をうけました。受賞者は、表記の通り計10名となっています。

続いて、各校 IAC の活動報告が行われました。まず、私たち魚津工業高校の発表をご覧ください。

本校は富山県東部の海に近い恵まれた環境にある新川地区の中の唯一の工業高校です。機械科、電気科、情報環境科の3学科においてもものづくりに関する基礎、基本的な内容を学習しています。

平成22年度より制服が学生服からブレザーに一新し、時代の変化に適応しながら活気あふれる学校として、地域との繋がりを密にした教育活動を行っています。また、卒業生は10,000名を超え新川地区の産業を支える技術者として活躍しています。

本校の校訓は、創造、それまで無かったものを新たに作ること。誠実、他人や仕事に対してまじめで真心があること。練磨、深く精神、技術、学問などをみかくことの3つです。

本校では、放課後や休業中に様々なボランティア活動を行っています。

6月、10月、生徒会、生活委員、交通委員による通学路、経田駅の清掃活動。7月、小学生対象のものづくり教室を開いています。ものづくり教室は、子供達に、ものづくりの楽しさを伝えることを目的とした活動です。8月、24時間テレビの募金活動、3歳親子ふれあい村事業、11月、かもめ児童センターとの交流、吉田科学館でのものづくり教室。12月、魚津ディサービスセンターとの交流、20年間連続実施している歳末助け合い募金活動への参加、2月、にいかわ総合支援学校との交流。

3月、経田っ子まつり、経田保育園との交流など、活動は一年を通して行っています。

このようなボランティアを行って成果があったと思われる点は、自らも社会の一員としての自覚ができたこと、人々や社会のために役立つ体験ができたこと、ボランティア活動の意義を理解できたことです。

終わりに、ボランティア活動している生徒が一部に偏り、一般生徒はまだまだボランティア活動の意識が低く、活動の時期や時間が限られているなどの問題点があります。今後は、多くの生徒や教職員にも自然にボランティア活動や親切活動が広まり、社会への関心や繋がりを深め、地域社会と一体となった活動ができればと考えています。

～発表終了後～

続いて、各学校の活動内容を簡単ではございますが、報告します。

まず、富山県立高岡商業高等学校は3年生8名・2年生9名・1年生2名、計19名で活動しており、年間の主な活動はこちらで、中でも校内清掃とウォーターボランティア、

グリーンカーテンの活動に力を入れています。

ウォーターボランティアでは、高岡の商店街で行われるウォーターランドというフェスティバルに参加し、子供たちと一緒に遊んで楽しんだり、仕事を手伝うという地域に根ざした、すばらしい活動です。グリーンカーテンは、環境エコ活動として行っている活動です。朝顔・風船かずら・ゴーヤに毎日水をやり、ゴーヤの実ができて、グリーンカーテンになることを楽しみにしながら活動しています。

富山県立南砺福光高等学校は、現在 2 年生 7 名・1 年生 5 名、計 12 名で活動しており、主な活動は国際交流活動と、ボランティア活動に分けられており。その中でもこちらの学校では、国際交流活動に力を入れています。

昨年度は、8 月に全国高校総合文化祭が富山県で開かれ、ゆうこうていけいこう 友好提携校のけいざんちゅうがく 稽山中学から

も先生と生徒が来校されました。その時にインターアクト部は、むぎやぶしひろう “麦や節披露” と交流活動の担当になり、日本文化を伝えました。また、9 月にオーストラリアの姉妹校から 20 名近く来校され、部活動見学とさよなら会の司会進行を担当しました。また今年度は、5 月にロシアから高校生の訪問団が本校に来校した際に、一緒に日本料理とロシア料理を作って交流しました。

おおとり 鵬学園高等学校は、3 年生 4 名・2 年生 6 名・1 年生 12 名、計 22 名で活動をしています。

こちらの IAC では、れんけいえんどう 地域連携沿道環境事業として、学校前の花壇の管理を行っています。花を植えるのは楽しいですが、草むしりは苦手と感じている部員が多いようです。今年の夏も暑かったので枯れないように担当を決めて、花の水やりを行っていました。また、近所の保育園で絵本の読み聞かせのボランティアを 2 週間に 1 回、定期的に行っています。

小松市立高等学校は、生徒会 6 名が中心となって、募金活動に力を入れて活動しています。

ふくし 福祉委員会、JRC、青少年赤十字と共同で、緑の募金・24 時間 TV チャリティ募金活動・赤い羽共同募金と多くの募金活動に積極的に参加しています。

続いて加賀中央インターアクトクラブです。身体障害者を支援するなげんじ 南陽園でのふれあい広場ボランティアでは、一日にアイス 1300 個もの販売を行います。また、花壇植かえとして、夏はベコニアを 200 株、冬はパンジーを 230 株植え年間を通して水まき、花壇の手入れを行っています。3 月にはドラえもん折り紙教室を行っています。海外との交

流では、ドラえもん折り紙を 300 個作り、タイ・スリウォン <sup>ロータリークラブ</sup> R C に贈ります。その他年間を通して、Eco キャップ集めを行っています。昨年度は約 5000 個を回収することができました。

遊学館高等学校は、部員計 35 名で毎週木曜日に活動しています。知的障害児の児童クラブ「すずかけクラブ」の放課後ボランティアでは、クラブを訪問して、知的障害児たちと仲良く遊んでいます。小中学生作文コンテスト「ぎぶん賞」入力ボランティアは、小中学生の作文コンテストで入賞した作品をワープロで打ち直すという活動です。漢字の変換・誤りを訂正するなど内容は様々です。

金沢高等学校インターアクトクラブは日本郵便ペンフレンドクラブへの取り組みと地域の清掃・美化活動に力を入れています。日本郵便ペンフレンドに加盟しており、はがき歌全国コンテストや全日本年賀状大賞コンクールなど様々な大会に参加しています。他にも手紙

<sup>ぶんかふっこうかつどう</sup>文化復興活動に参加したり、地域清掃として生徒が日頃利用しているバス停の清掃活動を行い、地域の皆様にも気持ち良くバスを利用していただけるようにしたりしています。

藤花学園尾山台高等学校インターアクトクラブは、現在 3 年生 8 名、2 年生 15 名、1 年生 7 名の計 30 名で活動しています。昨年度の活動では、清掃活動・エコ活動、募金活動に力を入れています。

学校の関係施設の清掃活動や金沢百万石祭りの会場の道路清掃をしたり、文化祭ではエコ・ユニセフについてのパネル展示や募金活動を行ったりしていました。クラブ員は他の部活動と兼ねている生徒が多いので、皆がまとまって活動することが少ないため、クラブ員は各部活動ごとに活動を行っています。

小松大谷高等学校インターアクトクラブは小松大谷高等学校吹奏楽部がクラブ員として活動を行っています。

そのため主な活動は表記のとおり、吹奏楽部として各種大会や演奏活動などを中心に行っています。

富山県立伏木高等学校インターアクトクラブは、生徒会が中心となって活動しています。平成 17 年度より国際交流科がスタートした伏木高等学校では、毎年友好校である中国大連市第十二中学、韓国清明高等学校、ロシアガルモニア校とホームステイを中心として、語学研修の派遣及び受入れによる国際交流活動に力を注いでいます。

石川県立寺井高等学校インターアクトクラブは、2010 年 12 月 15 日に創立総会が開かれ、能美 <sup>ロータリークラブ</sup> R C の支援やアドバイスを受けながら、平成 22 年度より活動を開始し

ました。今年度は、生徒会執行部 7 名・運動部代表 16 名、計 23 名で活動していました。

ふれあい福祉運動会ふれあい福祉運動会は能美市根上総合文化会館で行われ、障害者や福祉関係者、ボランティア約 500 名が、ハンディキャップの有無に関わらず、多彩な種目を楽しみました。また、運動会では参加者全員が輪になって複数の大玉を転がし、支え合いや結束を誓いました。

富山県立砺波工業高等学校インターアクトクラブでは、生徒会役員と各部活動が連携を取りながら、砺波ロータリークラブの支援を受けて活動しています。昨年度の主な活動として、おもちゃの病院、地域での清掃活動、地域での交流活動を行いました。おもちゃの病院は機械・電気・電子科の

3 つの工学部が、日頃の活動で学んだ技術を生かして壊れたおもちゃの修理を行って

り、地域のイベントあわに併せて年に 2 回、開設しています。地域の子供たちに大変好評で、毎回多くのおもちゃが持ち込まれています。また、清掃活動として、体育の授業や部活動で利用している砺波市陸上競技場の除草、家庭科の授業でお世話になっている砺波市南部なんぶデイサービスセンターの清掃活動を実施しています。清掃活動には全校生徒の 7 割が参加しています。

続いて、海外研修についての報告がありました。

日時は平成 25 年 3 月 21 日(木)～3 月 25 日(月)の 5 日間で、台湾に海外研修へ行きました。初日は小松空港に各自集合の後、結団式が行われ、台湾に向けて小松をあとにしました。初日の夜に台湾に到着し、そのままホテルで宿泊しました。

二日目以降の日程は表記の通りです。観光では、その土地の特色や文化を感じる事が出来ました。

学校訪問では、地元の学校に訪問し国際交流というものを実際に体験しました。また、食事たいわんも台湾料理・湘南料理しょうなんをご馳走になり、思い出の 1 つとなりました。

2 日目は千と千尋の神隠しのモデルとなった台湾台北市にある、九份きゅうふんを観光してきました。

映画の舞台となった場所を観光することが出来、貴重な時間となりました。

また、昼食しょうろんぼうは小籠包や餃子などの飲茶料理ぎょうざ やむいちゃを食べ、本場の味を味わうことが出来てよかったです。午後は 101 タワーに行きました。

101 タワーは 509,2m というとても大きなタワーでその中にある店で買い物などをしました。101 タワーの名前の由来は地上 101 階の高さを誇っていることからきています。

夕食後は、／屋台、露店、雑貨、売店、服屋、移動販売などの、いろいろな日用品や飲食のサービスを提供している、士林夜市しりんよいちに行き夜の台北市たいべいしで買い物などしてきました。夜でも人はとても多く、人気の観光スポットであることを感じられました。

3 日目は台北市たいべいしにある祐徳高等学校の生徒と交流をしてきました。／祐徳高等学校ゆうとくは1963年創立で、生徒は850名います。／今回は”ドラえもん”の折り紙を作ったり、祐徳高等学校の生徒とバレーをしたりして交流を深めました。

最後に「初めての海外での活動は緊張しましたが歴史を知ることができ、また、現地の方々と交流して貴重な経験ができとても良かったです。海外研修は、グローバル化が進む世の中で、日本の中には無い様々な世界を経験でき、とても刺激にもなりました。今後の課題などを学ぶことも多く、貴重な機会を与えてくださったことに感謝します」と支援してくださったロータリークラブに感謝の意を示して報告されました。

午後からは記念講演が行われ、Arai U D Workshopアライ ユニバーサルデザイン ワークショップの代表で「金沢美術工芸大学名誉教授」でもあり、グッドデザイン賞なども受賞しておられる、荒井利春様あらいとしはるから「多様なユーザーと創る人に優しいデザイン」という題目で講演していただきました。

まず、荒井先生の経歴からご覧ください。1972年「東京教育大学卒業」 1972年から六年間「株式会社日立製作所デザイン研究所ひたちせいさくしょ」に勤められ 1978年から七年間「でく工房」 1985年から28年間「金沢美術工芸大学」に勤め、2013年 Arai U D Workshopアライ ユニバーサルデザイン ワークショップ を開設されました。「日本デザイン学会理事」「グッドデザイン賞」 など数々の輝かしい経歴をお持ちです。

荒井先生は、今を生きる私たちの課題のひとつに「多様性と共生」を豊かに受け入れる社会づくり、暮らしの環境づくりがあると提案されました。その背景には、人は生まれ育つ過程で怪我や病気で身体機能に制限が発生することは多々あることであり、もしそのようなときにも、それぞれ大切にしてきた生活を自然に継続していけるようにする事が必要であると、問題提起もんだいていきされました。そして、その答えの一つとして、日常の生活

道具や住宅、公共建築などを誰にでも使いやすいものにしていくデザインが世界中で共通の取り組みとなり、誰にでも使いやすいものの必要性を示されました。さらに「ユニバーサル・デザイン」「デザイン・フォア・オール」「インクルーシブ・デザイン」など様々な言葉が作られ使われてきているそうです。

続いて、事例を交えた問題解決のための取り組みをお話いただきました。

デザインプロジェクトの進め方で大切なことは、デザインのはじめから実際のユーザーの方々が参加することだそうです。つまり、デザイナーが考えたものをユーザーが評価するのではなく、ユーザーとともに考えてデザインを進めていくことが成功の条件とおっしゃっていました。

このように、食器から家具や住宅、まちづくりまで具体的なデザインプロジェクトを紹介しながら、ユーザー参加型デザインに潜む様々な可能性を示されました。

ここからは、事例を示していきます。こちらは握力が低下しスプーンやフォークを持つことが困難な人のために、スプーンやフォークの長さ・先端の形・先端の大きさ・軽さ・手の間に入る引っかかる形を追求し、新たな概念を持つユーザーと浮上する可能性を探られました。その結果、このようなちょっとした曲げ加工を施すだけで、問題が解決したそうです。これには、ユーザーからも驚かれ、また、とても感謝されたそうです。

こちらは先ほどと同様に、握ることの困難なユーザーのために作られた鋏です。鋏は日常生活で必要性の高い道具ですが、握ることの困難な人にとっては使いづらいものです。そこで、押す動作で切れる鋏ができないか！という発想を新しい鋏の原型へつなげたいという思いから作られました。

続いて、こちらはキッチンになります。

車椅子は横移動ができない為、車椅子ユーザーが従来のキッチンで調理を行うことはとても大変なことです。そこで、センシティブなデザインを目標に丸みを帯びた形に作られたこのキッチンは、回転するだけで流し・まな板・調理に手が届き、移動をすることなく料理ができるようになっています。また、車いすユーザーにとってネックである、足を入れるスペースも確保されていることが分かります。

こちらは、扉の開閉ボタンです。

従来のものはエレベーターなどのボタンは上下に配置されたものがほとんどだと思いますが、そのボタンを左右につけました。これは、我々が暗闇の中でのものを探るとき、左右に手を動かすように、目が見えないユーザーもまたを同じ動作をとるためです。

今までの道具を振り返ると、すべて健常者にも使いやすいデザインであることがわかるかと思います。先生はユーザーとともにデザインを考えることで、どのようなことが大切かを追求し、時代に暮らすすべての人へ向けて多様性と共生を目標とした発想のものづくりをしていきたいと話しておられました。



実際、障害を持つ方がおられる家庭では、専用の生活道具があふれ、その方<sup>かた</sup>中心に家族が生活を送っているケースが多くみられます。しかし先生は、そのような考え方ではなく、多様性と共生を“Design for All <sup>デザイン フォア オール</sup> みんなのデザイン”を目標に実現されようと取り組んでおられました。

閉会式では、講評を野澤良成<sup>の式わよしなり</sup>会長からいただきました。その後、同じく次年度開催校<sup>かいさいこう</sup>が発表され、閉会宣言がされた後、閉会点鐘<sup>へいかいてんしょう</sup>で年次大会が終了しました。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。